

## 第4回「民具整理から見えてくる奥会津の暮らし」(11/14 開催) モニター参加者レポート

### 第4回「民具整理から見えてくる奥会津の暮らし」レポート

岩波友紀

まだ残る紅葉が日差しを浴びた光景を見ながら、心地よい気分で目指すは昭和村。旧喰丸小にたどり着くと、シンボルのイチヨウの木にはまだ半分くらいは葉っぱが残り、相変わらぬの姿。連続オープンディスカッション「奥会津の周り方」の4回目は、その校舎の中での開催でした。会場の窓から見えるイチヨウの木が美しい。講師の方の椅子や机も学校のもので、今回の雰囲気より盛り上げてくれました。

毎回違う町村での違うテーマで行われる本ディスカッションですが、昭和村でのテーマは「民具整理から見えてくる奥会津の暮らし」。私の興味は、決して美術品でも文化財でもない「民具」をどのように残していけるのか、あるいは残す価値をどのように定義づけるのか?ということでした。

県立博物館の山口さんのお話はまさにそれがテーマでした。民具は金銭的、歴史的価値がないということはどうやって保存できるかが課題であること。保存する場所や、管理する人がいない、それゆえ民具を集めても資料にならず死蔵する。そして除籍や廃棄という結果になってしまう現実がよく理解できました。また、鳥取での例が印象に残りました。町立資料館が、増えすぎて管理しきれなくなった民具を譲渡する試みをしたところ、希望者が殺到したということです。この話のひとつの側面は、民具を資料として残そうとしても管理しきれない実態。そしてもうひとつは多くの人が民具に価値を感じているということでした。民具をどう価値づけて保存、伝承につなげていくかが課題なのかと思いました。また、多くの人が民具に興味があって欲しいということであれば、現役のモノとして活用できる人が活用する方法もあるのではないかと思います。美術品や貴重な文化財ではないからなくなってしまふのはやはり違和感があります。日常品として生活に必要であったモノこそが、何か人の歴史を語るものではないかと改めて感じるのです。

からむし工芸博物館の松尾さんは、民具の活用という側面のお話でした。からむしは私でもよく知っている、昭和村で村一丸で取り組み保存、継承している技術であり、特産品ですが、民具を活用するという点でも役に立っているという視点が私には新しいものでした。確かに、昔から続けられてきたものを作るのに、その道具がいる。その道具はそれが作り続けられれば、現役として残っていく。民具だけのことを考えるのではなく、生活様式、産業を守ることと一体となる事が大切なのかな、という感を受けました。

20世紀アーカイブ仙台の佐藤さんは民具とは違ったお話ですが、保存、残して活用する事が共通です。写真のアーカイブについてです。私も写真をやっているのですが、普段から「アーカイブ」という言葉を口にしますが、この言葉が定着したのが震災が契機だったとい

う佐藤さんの言葉にうなずけました。津波では多くの写真が流され、記録が流されました。そのことによって昔を移した写真の貴重さを多くの人が実感したのではないかと思います。また、記録だけを目的にしたアーカイブは死蔵するという話も、印象的でした。記録してそのまま仕舞い込んで行けない。使って、みてもらい、伝えるという活用を続けないとアーカイブとして完成しないということでした。自分の写真がまさに死蔵していたり、保管してあるものを全く活用していないことを思い出してしまいました。

民具でも写真でも全てのことに共通する、残すということの意味を改めて感じさせてくれるお話でした。しかしやはり今回の保存というテーマでも経済性ということが必ず付き纏い、他のものとの喫緊な重要性を比べられると、続けていく事が難しいのは確かです。そのためただ保管するのではなくどう活用し、存在意味を持たせるかということが大きな事なのかと聞いていて感じました。写真の話に戻ってしまいますが、「写真は見てもらうことで初めて存在する」というある方の名言を思い出します。存在するという事は、人に認知してもらうということと同義ということですね。

12月開催の次回は最後の5回目。夏に行われた1回目から季節が変わりすでに晩秋。奥会津のそれぞれの街の季節も感じながら参加できたオープンディスカッションですが、最後は美しい雪景色の中で聞けるかもしれません。